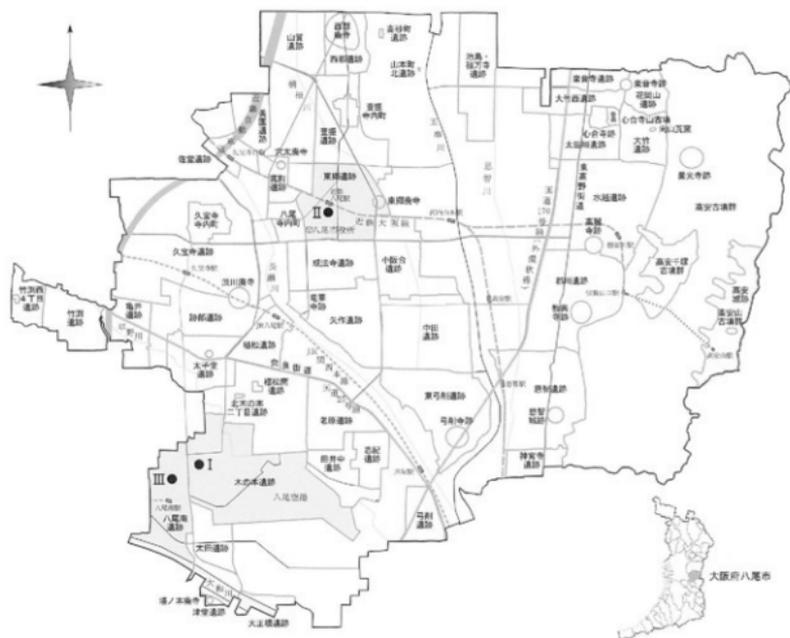


- I 木の本遺跡 (第26次調査)
- II 東郷遺跡 (第76次調査)
- III 八尾南遺跡 (第38次調査)

2015年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

- I 木の本遺跡 (第26次調査)
- II 東郷遺跡 (第76次調査)
- III 八尾南遺跡 (第38次調査)



2015年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

は し が き

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたりま
す。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれら
の先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの埋蔵文化財を破壊
から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次
第であります。

本書は、平成24・25年度に八尾市内で行った民間開発事業に伴う3遺跡、3件の発
掘調査報告をまとめたものであります。木の本遺跡、東郷遺跡では中世の生産域や居
住域に関連する遺構を、また八尾南遺跡では前期古墳の周濠と考えられる溝を検出し
ました。

本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をい
ただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長 西 浦 昭 夫

序

1. 本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成24・25年度に実施した民間開発事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したものである。
1. 本書作成の業務は、各現地調査終了後に着手し、平成27年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は当調査研究会 坪田真一が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成24年度版)をもとに作成した。
1. 本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は座標北(国土座標第VI系〔日本測地系〕)を示している。
1. 遺構名は下記の略号で示した。
井戸-SE 土坑-SK 溝-SD ビット-SP
1. 遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目次

はしがき

序

| | |
|-----------------------------------|----|
| I 木の本遺跡第26次調査(S K 2013-26)..... | 1 |
| II 東郷遺跡第76次調査(T G 2012-76)..... | 7 |
| III 八尾南遺跡第38次調査(Y S 2013-38)..... | 29 |

報告書抄録

I 木の本遺跡第26次調査 (S K 2013-26)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市木の本二丁目204番で実施した、分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第26次調査(S K 2013-26)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成26年2月24日～2月26日(実働3日)に実施した。調査面積は約23㎡である。
1. 現地調査には大塚 隆(現、研究会嘱託)・竹田貴子・村井俊子・村田知子が参加した。
1. 内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年3月31日をもって終了した。
遺物実測-市森千恵子・伊藤静江・村田
遺物トレース-市森
その他-坪田
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本文目次

| | |
|--------------|---|
| 1. はじめに | 1 |
| 2. 調査概要 | 2 |
| 1) 調査の方法と経過 | 2 |
| 2) 基本層序 | 2 |
| 3) 検出遺構と出土遺物 | 2 |
| 3. まとめ | 5 |

I 木の本遺跡第26次調査 (S K 2013-26)

1. はじめに

木の本遺跡は八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では木の本1～3丁目、南木の本2～9丁目、空港1丁目がその範囲とされている。地形的には河内平野の南西部、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置し、東に田井中遺跡・老原遺跡、西～南側には八尾南遺跡・太田遺跡が隣接する他、北側には太子堂遺跡・植松遺跡・植松南遺跡といった平野川流域に展開する遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和56年度に八尾市教育委員会が南木の本4丁目で行った試掘調査で、弥生時代中期前半～古墳時代後期の遺物包含層が確認されたことによる。続く発掘調査(市80～81)では弥生時代中期前半、古墳時代前期・中期の遺構が検出された。昭和57・58(1982・1983)年度には、八尾空港内の整備事業に伴い、当調査研究会が第1次調査を実施し、平安時代の条里水田の広がりを確認した。その後も河川改修や、下水道工事等に伴う調査が大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施され、弥生時代前期以降の遺跡であることが確認されている。

今回の調査地周辺では当調査研究会が第7次調査(S K 96-7)、10次(S K 2002-10)、13次調査(S K 2004-13)を実施している。東方の第7次調査では古代水田面の可能性がある地層、及びそれ以下では弥生時代～古墳時代頃の洪水砂や湿地性堆積を確認した。南東部の第13次調査では近世井戸を検出した。北西部の第10次調査では掘立柱建物や井戸等により構成される平安時代中期～後期の居住域を検出している。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

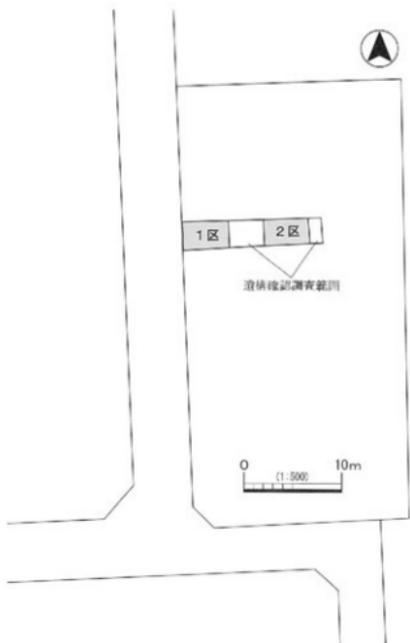
1) 調査の方法と経過

今回の調査は分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第26次調査（SK2013-26）である。なお本調査は、平成26年2月13日に実施した遺構確認調査（木の本遺跡2013-393）の結果を受けて実施したものである。

調査地は東西方向に敷設される下水管路部分にあたり、調査範囲は南北2.5m×東西4.5m×2箇所（西から1・2区）で、面積は約23㎡を測る。調査は2区から実施した。

調査にあたっては現地表（約T.P.+10.45m）下約1.1mまでを機械掘削とし、以下の約0.2mを人力掘削により調査を実施した。

調査では、調査地北部に位置する八尾市街区多角補助点（2A114：T.P.+10.103m）を標高の基準とした。



2) 基本層序

北壁を基本層序とする。

第0層は盛土・攪乱。第1層は旧耕土である。第2・3層はFe斑を含む固く締まる層相で、作土と考えられる。4層はブロック状の作土である。5～7層はMn斑・Fe斑を含む土壌化層で、作土と考えられる。5層は古代末～中世、6・7層は古代末の遺物包含層である。8・9層は水成層で、8層は汚れた土壌化部分と捉えられる。ア・イ層は断面で捉えた遺構状の層位である。

第2図 調査区位置図

3) 検出遺構と出土遺物

〈第1面〉

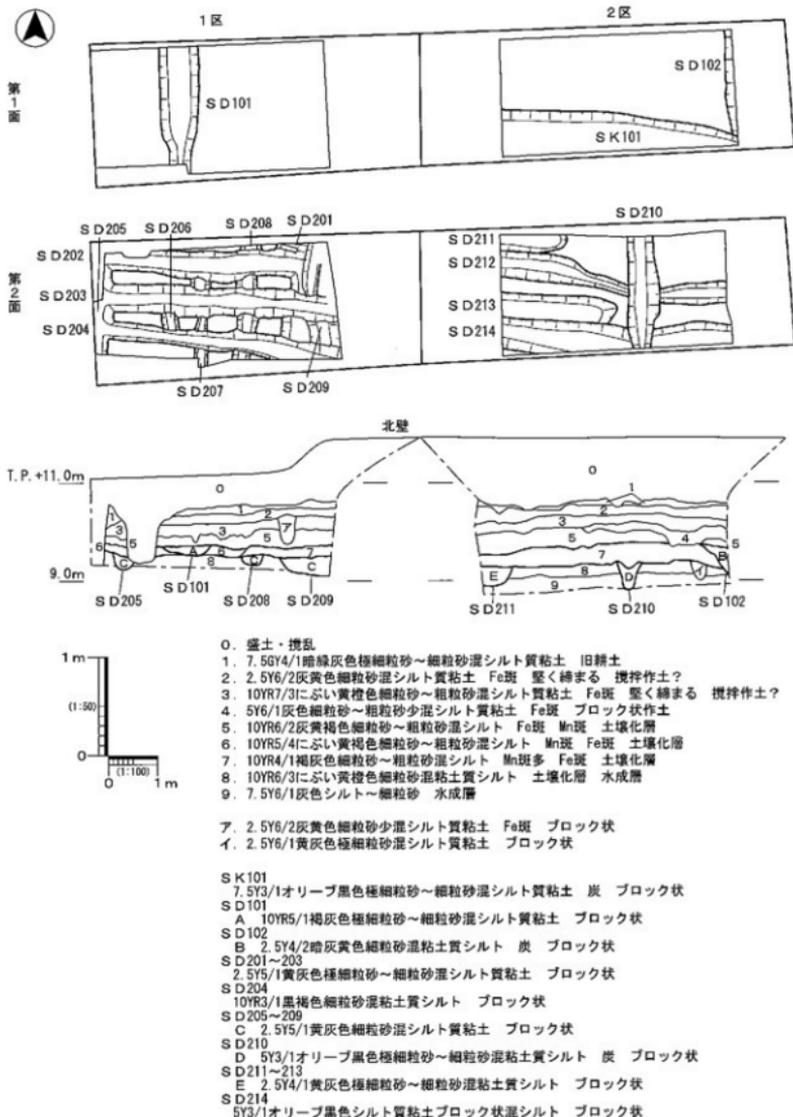
6・7層上面（約T.P.+9.4m）で土坑1基（SK101）、溝2条（SD101・102）を検出した。遺構確認調査で確認した遺構面にあたる。

SK101

2区南半で東西方向の屑を検出したもので、南に浅く落ち込む。検出部分の規模は東西約4.7m・南北約1.0m・深さ最大約17cmを測る。埋土は炭を含むブロック状の単層である。古代頃の土師器・須恵器片が少量出土した。

SD101

1区検出の南北方向に延びる溝である。規模は検出長約2.6m・幅約80cm、深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は古代頃の土師器片が出土した。



第3図 平面図

SD102

2区東端で検出した南北方向に延びる溝で、西屑のみの検出である。規模は検出長約2.3m・幅約20cm、深さ最大約30cmを測る。埋土は炭を含むブロック状の単層（B層）である。遺物は古代頃の須恵器片が出土した。

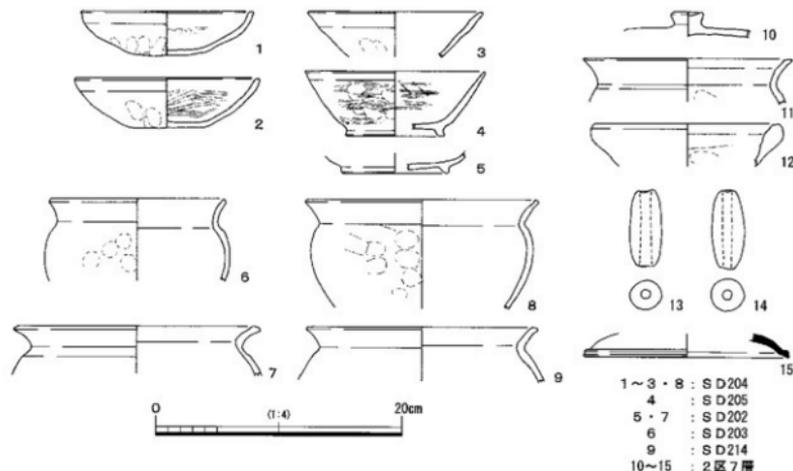
〈第2面〉

8層上面（約T.P.+9.2m）で、東西方向に平行して伸びる8条（SD201～204、SD211～214）と、これらに直交する南北方向の6条（SD205～210）を検出した。

東西方向の溝については、やや埋土が異なるものの、検出状況から見てSD201とSD212、SD202とSD213、SD203とSD214がそれぞれ連続すると考えられる。規模は長さ13m以上・幅30～70cm・深さ10～28cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。

南北方向の溝はSD205～209が1区で密集する状況で、埋土も共通である。規模は検出長約2.3m・幅0.2～1.2m・深さ10～20cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。2区ではSD201のみで、検出長約2.3m・幅約50cm・深さ約30cmを測る。埋土は炭を含むブロック状の単層である。これらの交差する溝群については、耕作関連の溝である可能性が高い。

遺物は各溝から古代頃の土師器、須恵器片が出土しており、1～9を図化した。また10～15は2区遺構検出時に7層から出土したものである。1～5は土師器碗で、4・5は高台を有する。体部～口縁部の形態では、口縁部が内湾する1、丸味を持つ2、直線的な3・4に分けられる。6～9は土師器甕である。いずれも外面が煤けた使用品で、7は口縁部内面まで煤が及ぶ。10は土師器蓋のつまみ部分である。11は土師器甕である。12は土師器甕のつまみ部分である。13は土師器甕である。14は土師器甕である。胎土中に砂粒を多く含む。13・14は土師器土鍾である。15は須恵器杯蓋である。これらの土器は平安時代前半に比定される。



第4図 出土遺物

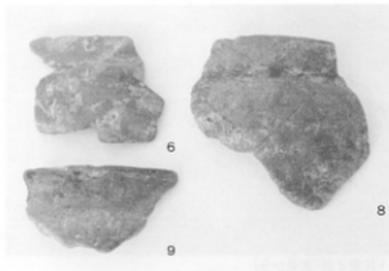
3. まとめ

今回の調査では、古代～中世頃の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ1箱である。

調査では第2面で平安時代前半頃の生産関連溝を検出し、当該期には当地が生産域であったことを確認した。第1面の遺構については明確ではないが、同じく中世頃の耕作関連遺構の可能性はある。北西部の第10次調査では平安時代中期～後期の居住域を検出しているが、当地は居住域にはなっておらず、運輸と生産域であったと捉えられよう。

参考文献

- ・原田昌則・他1984『木の本遺跡 -八尾空港整備事業に伴う発掘調査- 財団法人八尾市文化財調査研究会報告4』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一1998「Ⅶ 木の本遺跡第7次調査(S K96-7)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助2003「Ⅲ 木の本遺跡第10次調査(S K2002-10)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告76』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則2005「Ⅱ 木の本遺跡第13調査(S K2004-13)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告85』財団法人八尾市文化財調査研究会





調査地(南西から)



1区第1面(南から)



2区第1面(西から)



1区第2面検出状況(北東から)



1区第2面(南東から)



2区第2面(南西から)



2区北壁



1区調査状況(北東から)

II 東郷遺跡第76次調査 (T G 2012-76)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市東本町3丁目37、39の一部で実施した分譲住宅建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第76次調査(TG2012-76)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成24年10月9日～10月13日(現場実働5日)に実施した。調査面積は約48㎡である。
1. 現地調査には市森千恵子・伊藤静江・梶本潤二・芝崎和美・田島宣子が参加した。
1. 内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年3月をもって終了した。
遺物復元-梶本・竹田貴子・田島
遺物実測-飯塚直世・市森・伊藤・國津玲子・芝崎・永井律子・村田知子・村井俊子
遺物トレース-市森
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本文目次

| | |
|--------------|----|
| 1. はじめに | 7 |
| 2. 調査概要 | 8 |
| 1) 調査の方法と経過 | 8 |
| 2) 基本層序 | 11 |
| 3) 検出遺構と出土遺物 | 11 |
| 3. まとめ | 19 |

II 東郷遺跡第76次調査 (TG2012-76)

1. はじめに

東郷遺跡は八尾市の中央やや北西部に位置し、現在の行政区画では本町1・7丁目、北本町2丁目、東本町、光町、桜ヶ丘、荘内町がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。同地形上で北は萱振遺跡、南は成法寺遺跡、西は宮町遺跡・八尾寺内町、南東は小阪合遺跡と接している他、遺跡範囲内の東部は東郷廃寺推定地となっている。

当遺跡発見の契機は、昭和46年、八尾市東本町2丁目での水道管埋設工事の際、墨書人面土器が出土したことによる。そして昭和56年度以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されており、これらの成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地周辺では、北側隣接地で第67次調査(TG2006-67)を実施しており、中世の遺物を含む地層の他、古墳時代前期の溝を、また東方の第46次調査(TG94-46)では、中世の溝や古墳時代前期、弥生時代中期の遺構を検出している。一方、西方で実施した第30次調査(TG89-30)・第34次調査(TG90-34)・第70次調査(TG2007-70)・第75次調査(TG2012-75)では、平安時代末～室町時代の長期間に亘る集落遺構を確認している。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、平成24年9月24日に実施した遺構確認調査〈東郷遺跡（2012-222）〉の結果を受けて実施した分譲住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が東郷遺跡内で行った第76次調査（TG2012-76）である。

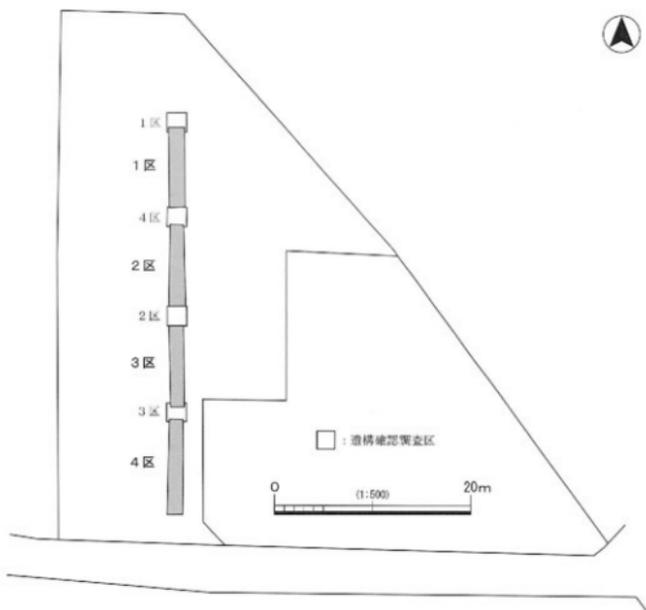
調査地は遺構確認調査を実施した下水人孔部分（1～4区。以下、確認1～4区とする。）を繋ぐ管路部分4箇所（北から1～4区）で、規模は幅約1.5m、延長約32.0m、総面積約48㎡を測る。調査は北から順に実施した。

掘削は、現地表下0.7～1.0mを機械掘削し、以下約0.25mは人力掘削により調査を行った。

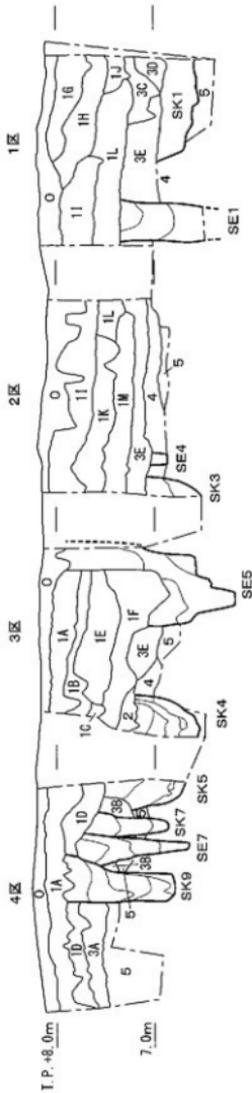
平面実測に当たっては、調査区平面形に合わせて任意の南北ラインを設けた。

遺構名は遺構略号＋遺構番号とし、北から順に付した。

調査では、調査地西約55mに位置する八尾市街区補助点（3C357：T.P. +8.373m）を標高の基準とした。

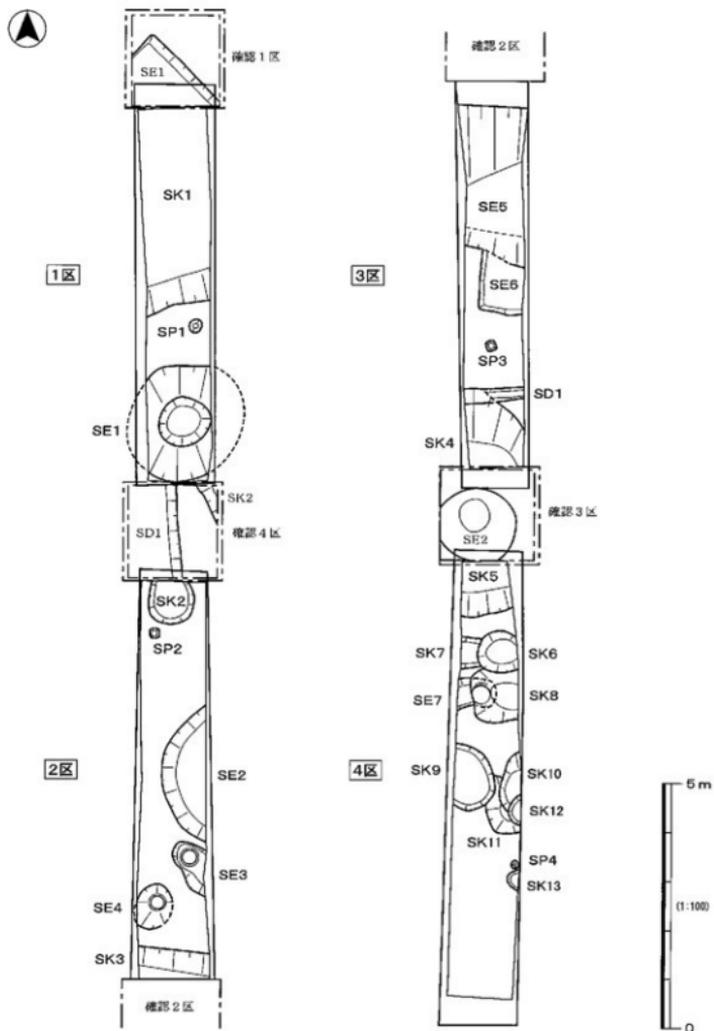


第2図 調査区位置図



0. 礫土・積乱
- 1A. 2.5V4/2暗灰色極細粒砂～極細粒少混シルト質粘土 臺地層
 1B. 2.5V6/2区黄色粘土～極細粒砂 版築状 臺地層
 1C. 2.5V6/2暗灰色粘土質シルト 炭・埴土 臺地層
 1D. 2.5V5/3黄褐色極細粒砂～極細粒少混粘土質シルト ブロック状臺地層
 1E. 2.5V5/5黄褐色極細粒砂～極細粒少混シルト 臺地層
 1F. 2.5V5/1黄灰色極細粒砂～極細粒少混シルト 臺地層
 1G. 2.5V6/1濃い黄褐色極細粒砂～極細粒砂 臺地層
 1H. 2.5V3/1黒褐色極細粒砂～極細粒粘土質シルト 炭 臺地層
 1I. 2.5V5/3暗灰色極細粒砂～極細粒少混粘土質シルト 臺地層
 1J. 2.5V3/2黄褐色極細粒砂～極細粒少混シルト ブロック状臺地層
 1K. 2.5V7/3黄褐色極細粒砂～極細粒少混粘土質シルト 臺地層
 1L. 2.5V4/2暗灰色極細粒砂～極細粒少混シルト 臺地層
 1M. 10V86/2区黄褐色粗粒砂～極細粒少混シルト 臺地層
 2. 2.5V5/2区黄色シルト～粗粒砂 水成層？
 3A. 2.5V5/2暗灰色極細粒砂～極細粒少混シルト ブロック状臺地層
 3B. 2.5V4/2暗灰色極細粒砂～極細粒少混シルト 臺地層
 3C. 5V5/1灰色極細粒砂～粗粒砂多混シルト ブロック状臺地層
 3D. 2.5V5/1黄灰色極細粒砂～極細粒少混粘土質シルト ブロック状臺地層
 3E. 10V85/1極灰色極細粒砂～極細粒少混粘土質シルト 土壌化層 臺地層？
 4. 2.5V5/1黄灰色極細粒砂～極細粒少混シルト 土壌化層
 5. 5V6/1灰色シルト～極細粒砂互層 水成層

第3図 西壁断面図



第4図 平面図

2) 基本層序

西壁を基本層序とする。

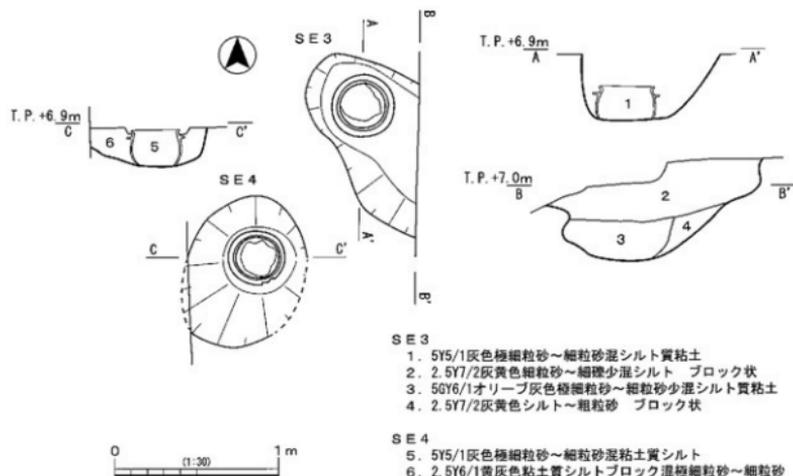
第0層は盛土・攪乱。第1層は整地層で、13層(第1A~1M層)に分層できる。層厚は4区が最も薄く約40cm、1~3区では80~120cmを測る。概ね均質な層相であるが、3区では版築状の第1B層、1・4区ではブロック状を呈する第1D層、第1J層が見られる。時期的には近世~近代に比定される。第2層は3区南部でのみ見られたシルト~粗粒砂である。水成層と考えられ一時的な洪水砂の可能性がある。第3層は中世頃の整地層と考えられ、5層(第3A~3E層)に分層できる。1区北端の第3C・3D層や、4区第3A層はブロック状を呈する。1~3区第3E層は土壌化層の可能性があり、中世の遺物包含層となっている。第4層は第5層の土壌化部分である。第5層は水成層で、河川堆積と捉えられる。1~3区では現地表下約1.2mのT.P.+7.0mで検出されるが、4区南端ではT.P.+7.5mと高くなっている。

3) 検出遺構と出土遺物

第4・5層上面で井戸7基(SE1~7)、土坑13基(SK1~13)、ピット4個(SP1~4)、溝1条(SD1)を検出した。これらは主に第4層を構築面とするが、SE1・2・5・6、SK9・13、SD1は第1層中、及び下面が構築面である。

SE1

1区南端部で検出した近世井戸である。掘方は直径約2.4mを測る円形を呈し、中央には直径約1.0mの円形の井筒痕が認められる。検出面より約0.9mまでの掘削範囲では井筒は検出されなかった。埋土は井筒部分で2層、掘方部分で3層を確認した。遺物は19世紀頃までの陶磁器、瓦の他、中世の瓦器・土師器が出土した。



第5図 SE3・4平面図

SE2

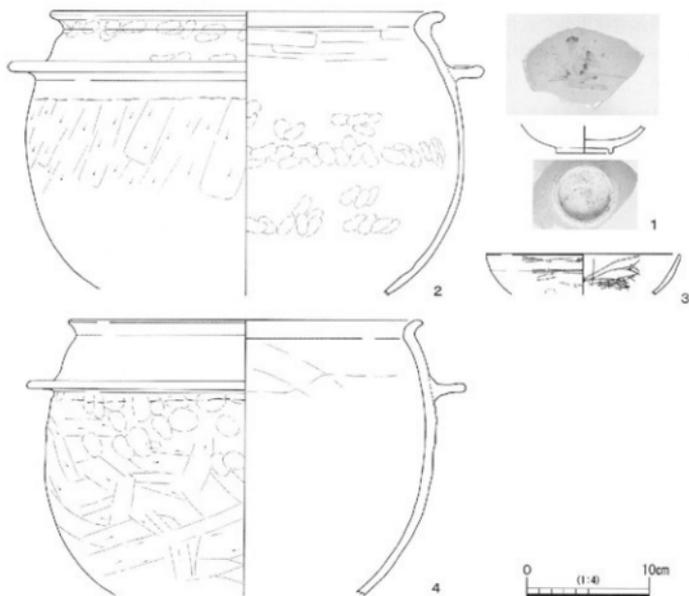
2区中央で検出した近世井戸で、弧状を成す掘方の西部を検出した。掘方は直径3.0m程度の円形に復元できるが詳細は不明である。掘方部分の埋土はブロック状の5層を確認した。遺物は19世紀頃までの土師器、陶磁器、瓦が出土しており、1を図化した。1は京焼風陶器の碗で、高台部は露胎である。見込みに楼閣山水文を描き、高台裏には「小松吉」の印銘がある。

SE3

2区南部に位置し、北部はSE2に削平され、東は調査区外に至るため詳細は不明である。井戸枠として底部を欠いた土師器羽釜を使用しており、数段を重ねるのが通例であるが最下段のみ遺存している。掘方は北西-南東方向に主軸を置く楕円形を呈し、枠は掘方の北西端に位置している。掘方の検出部分の規模は長辺約1.1m・短辺約0.8m・深さ約0.7mを測る。枠内埋土は5Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土、掘方埋土はブロック状の3層を確認した。枠内埋土、掘方埋土からは12世紀後半頃の土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器鉢片が出土した。土師器羽釜(2)は口径32.0cm・鈎径38.6cm・残存高約23.2cmを測る。外面は煤け、内面には焦げが認められる使用品である。3は掘方出土の和泉型瓦器椀で、内外面に細いヘラミガキを施す。

SE4

SE3の南西部に近接して検出した。SE3と同じく羽釜井戸で、最下段のみ遺存している。

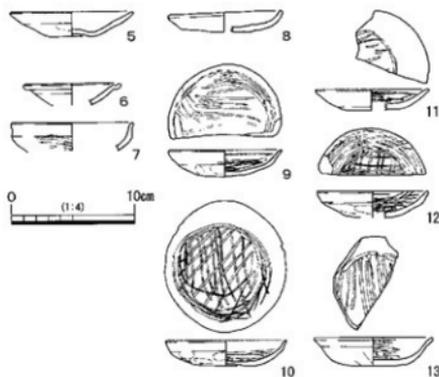


第6図 SE2・3・4出土遺物

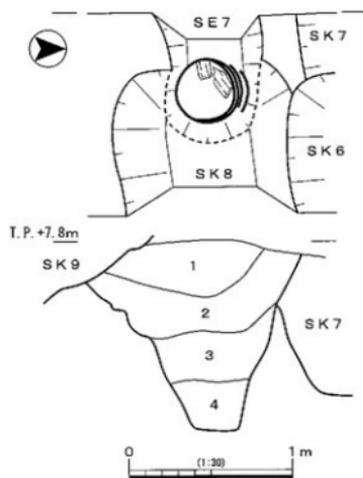
掘方は南北に主軸を置く楕円形を呈し、検出部分の規模は長辺約0.9m・短辺約0.7m・深さ約0.4mを測る。枠内埋土は5Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト、掘方埋土はブロック状の2層を確認した。掘方埋土からは羽釜等の土師器片が少量出土した。羽釜(4)はSE3(2)よりひとまわり小さく、口径28.8cm・鈎径35.6cm・残存高22.5cmを測る。2と同様に煤・焦げが認められる使用品である。

SE5・6

3区北部で検出したもので、詳細は不明であるが規模等から勘察して近世井戸とした。SE5は北部で東西方向の直線的な層を検出したもので、南部は整地層である第1層により削平されている。検出部分の規模は南北約3.0m・深さ約1.8mを測る。埋土はブロック状の4層を確認した。15世紀頃の土師器皿、瓦器拵鉢、東播系須恵器鉢の他、12世紀頃の土師器皿、瓦器碗が出土しており、5を図化した。5は底部が突出するへそ皿で、15世紀頃に比定される。SE6は方形を呈する掘方の南西部を検出したが、北部をSE5に削平される他、東壁断面によるとSE5との間にもう1基存在した井戸と思われる遺構にも削平されており、この部分が平面的に捉えられなかったため詳細は不明である。検出部分の規模は一辺1.2m以上・深さ1.6m以上を測る。埋土はブロック状の6層を確認した。埋土からは12世紀後半頃までの土師器、瓦器が出土しており、6・7を図化した。6は「て」の字状口縁の土師器皿、7は深めの瓦器皿である。12世紀初頭～前半に比定されよう。層位的に見て遺構の時期はこれより下るもので、SE5の15世紀頃に近いものと考えられる。



第7図 SE5・6・7出土遺物



1. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～極細粒砂混シルト質粘土、ブロック状
2. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂混シルト、ブロック状
3. 10YR5/1橘灰色細粒砂～極細粒砂混シルト、ブロック状
4. 10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロック混細粒砂

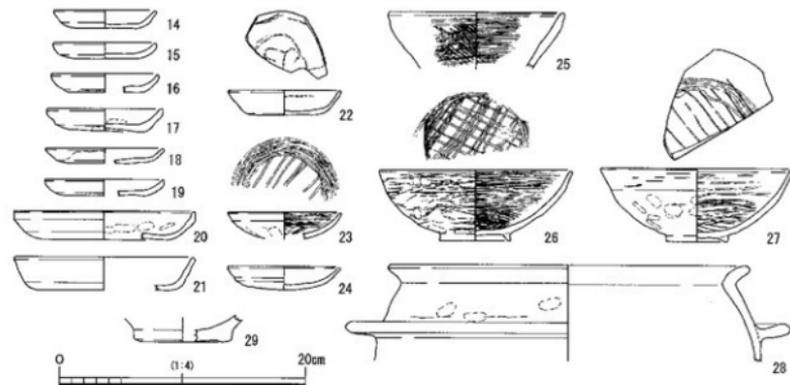
第8図 SE7断面図

SE7

4区北部に位置する曲物井戸で、東部はSK8に、南部はSK9に削平され、西は調査区外に至るため詳細は不明である。掘方平面形は東西に長い楕円形と考えられ、規模は東西0.8m以上・南北1.3m以上・深さ約1.4mを測る。曲物は掘方の東端に位置し、最下段及び2段目の一部が遺存していた。最下段曲物は直径約38cm・高さ約20cmを測る。埋土は曲物内が2.5Y6/1黄灰色シルト混極細粒砂～粗粒砂、掘方部分はブロック状の4層を確認した。遺物は12世紀後半頃の土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿が出土しており、8～13を図化した。8は土師器皿である。口縁端部の一箇所に煤の付着が認められることから、灯明皿として使用していることが分かる。9～13は瓦器皿で、10は完形で、口径9.8cmを測る。外面にヘラミガキを施すものは無く、見込みの暗文は9・11・13が平行、10が斜格子、12が格子である。

SK1

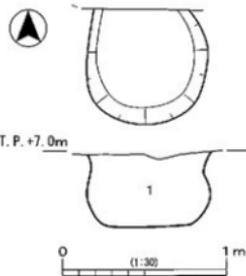
1区北半を占める土坑である。西南西－東北東方向の肩から北に落ち込むもので、深さ約40cmを測る。北の確認1区において方形の掘方の角部を検出しており、これを含めると南北5m程度の規模に復元される。埋土は10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト（ブロック状）の単層である。遺物は12世紀後半頃までの土師器皿・羽釜、瓦器碗・皿、陶磁器が多く出土しており、14～29を図化した。14～21は土師器皿で、20・21は大皿にあたる。17は完形で、口径9.5cmを測る。22～24は瓦器皿である。外面にヘラミガキを施すものは無く、見込みの暗文は深めの22が螺旋、23が平行である。24は器壁の剥離が著しい。25～27は瓦器碗である。25は器壁が厚く、口縁端部内面に沈線を巡らせ、ヘラミガキは内面が密な圏線状、外面は分割ヘラミガキである。これらの特徴から楠葉型の可能性がある。12世紀初頭頃のものか。26・27は和泉型瓦器碗で、見込みの暗文は26が格子、27が平行である。内面のヘラミガキは共に比較的密で、外面は27が疎らである。26は12世紀中頃、27は12世紀後半に比定される。28は土師器羽釜、29は中国製白磁碗で、共に12世紀代に比定される。



第9図 SK1出土遺物

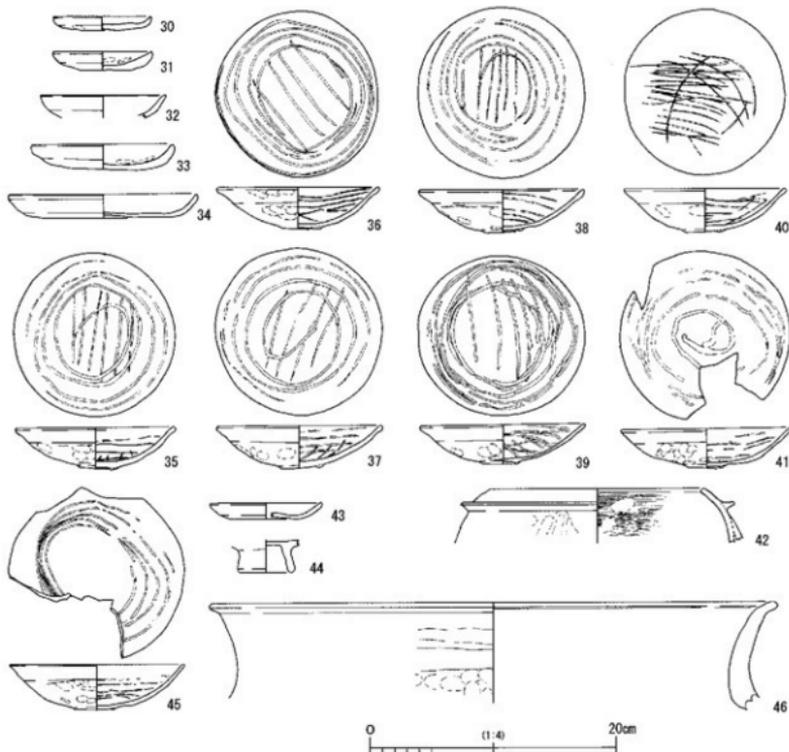
SK2

2区北端に位置する。検出部は平面隅丸長方形を呈し、検出部分の規模は東西約90cm・南北約90cm・深さ約46cmを測る。北の確認4区において、東層が直線的に北西に延びることを確認しており、これを含めると南北3m以上の規模となる。さらに北側についてはSE1に削平されている。断面形状はやや袋状を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は12世紀後半～13世紀前半の土師器皿・耳皿・羽釜、瓦器碗・皿・甕・鍋、東播系須恵器甕、陶器が出土しており、43～46を図化した。43は土師器皿である。44は土師器耳皿の高台部と考えられる。45は瓦器碗で、ヘラミガ



1. 5G14/1暗オリーブ灰色シルト
～516/1灰色極細粒砂～細粒砂のブロック

第10図 SK2平面図



第11図 SK2・4出土遺物

キは内面の圏線状のみである。13世紀中頃に比定される。46は陶器甕の口縁部で、常滑焼である可能性が高い。

SK3

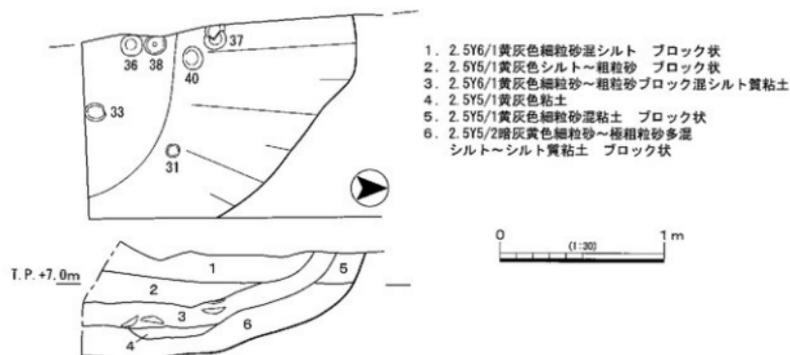
2区南端に位置する。東西方向の直線的な肩から南に落ち込むもので、検出部分の規模は東西約1.5m・南北約60cm・深さ約60cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト(ブロック状)、下層が2.5Y4/1黄灰色シルトである。遺物は出土していない。

SK4

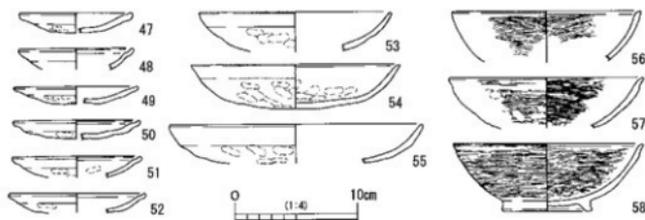
3区南端に位置する。北西-南東方向の弧状を成す肩から南西に落ち込むもので、円形の掘方を有すると考えられる。検出部分の規模は東西約1.5m・南北約1.6m・深さ約65cmを測る。断面碗形に近く、埋土はブロック層を基調とする6層を確認した。なお南部は確認3区で検出された桶枠井戸SE2に削平されていると考えられる。遺物は13世紀中頃までの土師器皿・羽釜、瓦器碗・三足釜・甕、中国製白磁碗等が多く出土しており、瓦器碗については完形品が集積する状況が西部で見られた。このうち30～42を図化した。30～34は土師器皿で、31は完形品である。34は大皿にあたる。35～41は和泉型瓦器碗である。35～40は完形品で、いずれも法量は口径13.0～13.5cm、粘土紐状の低い高台、内面のヘラミガキは粗い圏線状と見込みに平行線状というもので、40の見込みの平行線状暗文がやや細く密であるものの、ほぼ同一規格の製品であるといえよう。41は見込みが圏線状暗文のみである。42は瓦器三足釜である。これらは13世紀前半～中頃に比定される。

SK5

4区北端に位置する。東西方向の弧状を成す肩から北に落ち込むもので、円形の掘方を有すると考えられる。検出部分の規模は東西約1.2m・南北約1.1m・深さ約55cmを測る。断面碗形に近く、埋土はブロック層を基調とする5層からなる。全体に炭を含む層相で、下部では層厚10cm程度の炭層も見られた。なお北部は確認3区で検出されたSE2に削平されていると考えられる。遺物は12世紀前半までの土師器皿・羽釜、瓦器碗が出土しており、47～58を図化した。47～55は土師器皿で、53～55は大皿に分類される。47～52は「て」の字状口縁皿である。56～58は和泉型瓦



第12図 SK4平面断面図



第13図 SK5出土遺物

器碗である。いずれも内外面に密にヘラミガキを施す。見込みの暗文は全容の分かる58が乱方向に施す他、57は格子状の可能性もある。これらの土器の時期については、土師器皿では厚手の47、瓦器碗では57が12世紀代の可能性があるが、他は11世紀代に収まると考えられる。

SK6

4区北部に位置する。平面形は円形に近く、規模は東西80cm以上・南北約85cm・深さ約75cmを測る。掘方は垂直近くに掘られており、埋土は上層が2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト、下層が2.5Y5/1黄灰色シルト～細粒砂で、共にブロック状を呈する。遺物は12世紀後半の土師器皿・羽釜、瓦器碗が出土したが、SK8との切り合い関係から、遺構の時期は13世紀初頭以降である。出土土器から59を図化した。59は和泉型瓦器碗で、見込みに平行線状暗文を施す。

SK7

4区北部に位置し、東はSK6、南はSE7に削平され、西は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は東西45cm以上・南北約55cm・深さ約85cm、西壁では南北幅1.0mを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状の3層からなる。遺物は出土していない。

SK8

SK6の南に隣接し、これに削平されている。検出部の平面形は隅丸方形に近く、規模は東西1.0m以上・南北1.0m以上・深さ約70cm、東壁では南北幅1.5mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の3層からなる。遺物は12世紀後半～13世紀前半の土師器皿・羽釜、瓦器碗、須恵器片が出土しており、和泉型瓦器碗(60・61)を図化した。60はヘラミガキが内面のみで、見込み暗文は平行線状の可能性もある。高台は低い粘土紐状である。61は内外面にヘラミガキを施し、見込み暗文は平行線状である。60は13世紀前半、61は12世紀後半に比定される。

SK9

4区中央西に位置し、西は調査区外に至る。平面形は楕円形を呈すると思われ、規模は東西0.9m以上・南北約1.4m・深さ約1.1mを測る。西壁では上部の南北幅1.9mを測る。断面方形に近く、埋土はブロック状の5層からなる。遺物は13世紀初頭までの土師器皿・羽釜、瓦器碗・三足釜、須恵器片が出土したが、第10層上面の構築であり、時期は近世であろう。

SK10

4区中央東に位置し、南部をSK12に削平される他、東は調査区外に至るため詳細は不明である。南北方向の弧状をなす肩から東に落ち込むもので、規模は東西45cm以上・南北約1.2m・深

さ約65cmを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状の3層からなる。遺物は土師器皿、瓦器碗の小片が出土した。

SK11

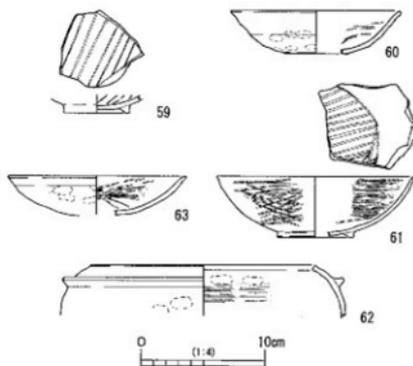
SK9・10・12の間に位置し、これらに削平されているため詳細は不明である。検出部の規模は東西約70cm・南北約1.2m・深さ約60cmを測る。埋土はブロック状の2層からなる。遺物は13世紀初頭頃までの土師器皿・羽釜、瓦器碗・三足釜が出土しており、62を図化した。62は瓦器三足釜で、内面にヨコハケを施す。

SK12

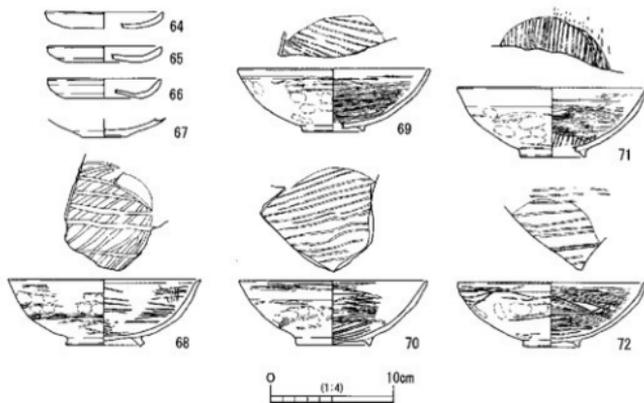
SK10・11に重複して位置し、これらを削平する他、東は調査区外に至る。検出部の平面形は半円形で、規模は東西約25cm・南北約60cm・深さ約70cm、東壁では南北幅90cmを測る。断面逆台形に近く、埋土はブロック状の3層からなる。遺物は出土していない。

SK13

4区南部に位置し、東は調査区外に至る。検出部の平面形は半円形で、規模は東西約25cm・南北約45cm・深さ約60cmを測る。断面方形に近く、埋土はブロック状の3層からなり、堆積状況から柱穴の可能性ある。遺物は近世陶磁器、瓦器、瓦が出土した。



第14図 SK 6・8・11、SP 1出土遺物



第15図 包含層出土遺物

ピット

全域で散発的に検出した。平面形はSP1・4が円形、SP2・3が方形、断面形状はSP1が逆三角形、SP2・3・4が方形を呈する。規模(長辺×短辺×深さ)はSP1-27×25×20cm、SP2-20×20×14cm、SP3-20×20×9cm、SP4-16×14×16cmである。埋土はいずれもブロック状の単層である。遺物はSP1から13世紀前半の土師器皿、瓦器腕片、SP2から12世紀後半の土師器皿、瓦器腕片が出土した。63はSP1出土の瓦器碗で、ヘラミガキは内面のみで、見込み暗文は平行線状の可能性がある。

SD1

3区南部で検出した東西方向に直線的に延びる溝である。規模は検出長1.2m・幅約23cm・深さ約4cmを測る。断面皿状で、埋土は近世の整地層である第1F層である。遺物は出土していない。

包含層出土遺物

64~72は調査区南部でSE7、SK6~8を検出する際に出土した遺物である。64~66は土師器皿である。67は中国製磁器で、同安窯系皿と考えられる。底部はヘラケズリによる萐箭底で、露胎である。68~72は和泉型瓦器碗である。見込みの暗文は68が太い斜格子状、他は平行線状である。いずれも内面のヘラミガキは比較的密で、外面は疎らである。70は煙しが不完全で、外面が灰色を呈する。これらの遺物は12世紀後半に比定される。

3. まとめ

今回の調査では、平安時代後期~近世の井戸・土坑・ピット等の居住域を示す多くの遺構群を検出した。出土遺物量はコンテナ4箱である。

当該時期の居住域を示す遺構・遺物は、当地北部~西部の第30・34・67・70・75次調査において確認されている。これらの各調査地においても井戸・土坑・ピット等が多く確認されており、第34次調査では掘立柱建物1棟が検出されている他、第70次調査では狭い範囲に16基もの井戸が重複して構築されている状況が見られた。当地を含めたこれらの調査地は、古代より難波と大和を結ぶ主要街道であった立石嶺道の北側に近接しており、中世以降、街道沿いに成立した集落と捉えられる。一方、北に約200mの第3・4・15・16・18次調査地一帯においては同時期の水田遺構が検出されており、当居住域に付随する生産域が北方に広がっていたと考えられよう。なお今回検出した土坑SK5については、出土遺物からみて11世紀後半~末に遡る可能性がある遺構である。当該期の遺構としては周辺で初例であり、当地が最も早い段階に成立した集落域であった可能性を示唆するものである。

なお中世の遺構については、南の4区ではT.P.+7.8m、北の1区ではT.P.+7.0mで検出され、2区の羽釜井戸は検出面において最下段の枠のみ遺存している状況であった。このことから北部では中世~近世における土地の改変(整地)がより深くまで及んでいることが確認されたと言える。この状況はさらに北部に及んでおり、北側に隣接する第67次調査地においてはT.P.+6.2~6.6mまで中世~近世の地層となっている。

参考文献

- ・西村公助2007「Ⅲ 東郷遺跡第67次調査（TG2006-67）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助1995「Ⅳ 東郷遺跡第46次調査（TG94-46）」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助1995「Ⅰ 東郷遺跡第30次調査（TG89-30）」『東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則1999「Ⅰ 東郷遺跡第34次調査（TG90-34）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一・他2011「Ⅴ 東郷遺跡第70次調査（TG2007-70）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告135』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋・高木真光・他1983「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度 財団法人八尾市文化財調査研究会報告2』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋1989「Ⅰ 東郷遺跡発掘調査報告（第11次～第16次・第18次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和63年度 財団法人八尾市文化財調査研究会報告17』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』



調査地(南から)



1区機械掘削(北から)



1区全景(南から)



1区SK1(南東から)



1区SE1(東から)



1区SE1(東から)



1区西壁



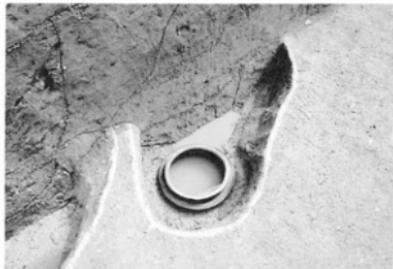
1区調査状況(北から)



2区全景(北から)



2区SE2(西から)



2区SE3(北西から)



2区SE3(西から)



2区SE4(南東から)



2区SE4(南から)



2区西壁



2区調査状況(南西から)



2区SK2、SP2(西から)



2区SK2(南から)



3区全景(南から)



3区全景(北から)



3区SE5・6(西から)



3区SK4(南から)



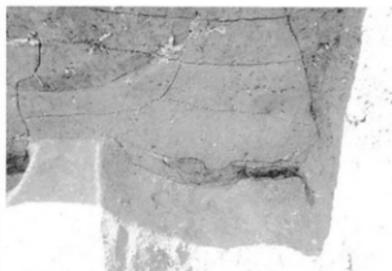
3区SK4土器出土状況(北東から)



4区東壁



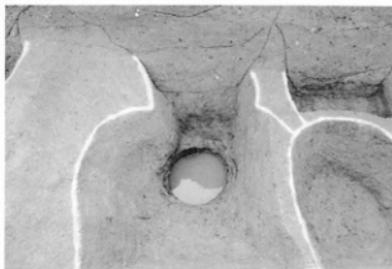
4区全景(南から)



4区SK5西壁



4区SE7、SK8(東から)



4区SE7(東から)



4区SE7(西から)



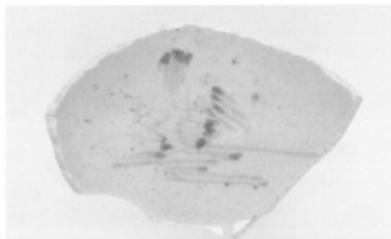
4区SE7、SK6~8(西から)

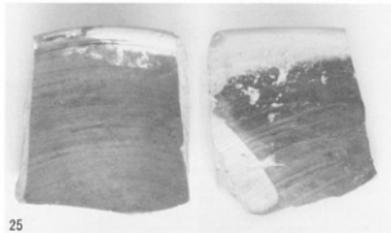


4区SK9~12検出(東から)



4区SK9~12(西から)









40



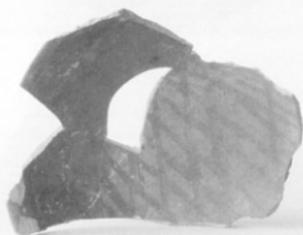
41



69



45



68



70



71

III 八尾南遺跡第38次調査 (Y S 2013-38)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目1番7で実施した、宅地造成に伴う八尾南遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡第38次調査(Y S 2013-38)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 樋口 薫が担当した。
1. 現地調査は、平成25年8月19日～8月22日(実働4日)に実施した。調査面積は約50㎡である。
1. 現地調査には飯塚直世・市森千恵子・竹田貴子・田島宣子が参加した。
1. 内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成27年3月31日をもって終了した。
遺物実測-飯塚・市森・伊藤静江・國津玲子・芝崎和美・永井律子
遺物トレース-市森
デジタルトレース-樋口
遺物写真撮影・編集-垣内洋平・樋口
1. 本書の執筆・編集は樋口が行った。

本文目次

| | |
|--------------|----|
| 1. はじめに | 29 |
| 2. 調査概要 | 30 |
| 1) 調査の方法と経過 | 30 |
| 2) 基本層序 | 31 |
| 3) 検出遺構と出土遺物 | 33 |
| 3. まとめ | 37 |

Ⅲ 八尾南遺跡第38次調査 (Y S 2013-38)

1. はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する八尾南遺跡は、本市の南西部、現在の行政区画では、西木の本一～四丁目、若林町一～三丁目の東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。地形的には、遺跡の大部分を旧大和川水系により形成された沖積平野が占めるほか、南端部には羽曳野丘陵から派生した河内台地が、西端部には河内台地からさらに連なる上町台地が展開している。現地表面高は、遺跡南端部が最も高くT.P.+12.0m前後、北端部が最も低くT.P.+10.0m前後である。比高差は約2.0mを測り、南から北に傾斜する地勢を有する。

八尾南遺跡は、1973(昭和48)年の地下鉄八尾南駅建設工事により発見された遺跡である。これを受けて行われた八尾南遺跡調査会による発掘調査では、弥生～古墳時代の居住域や墓域に伴う遺構、遺物が多数検出された。その後、大阪府教育委員会をはじめ、(財)大阪府文化財センター、八尾市教育委員会、当調査研究会により断続的に調査が行われ、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡として認識されるようになった。また、今回の調査地の周辺では、平成16(2004)年度から八尾市営大正住宅建て替え工事に伴う発掘調査が当研究会により行われており、古墳時代～近世の居住域や生産域に関連する遺構群や河川跡などが検出されている。

本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が密集している。北東部～南東部には弥生時代～中世の複合遺跡である木の本遺跡や太田遺跡が存在するほか、北部～西部には旧石器時代～中世の複合遺跡で、本遺跡と各時代を通じて連続性が認められる長原遺跡(大阪市)が隣接している。



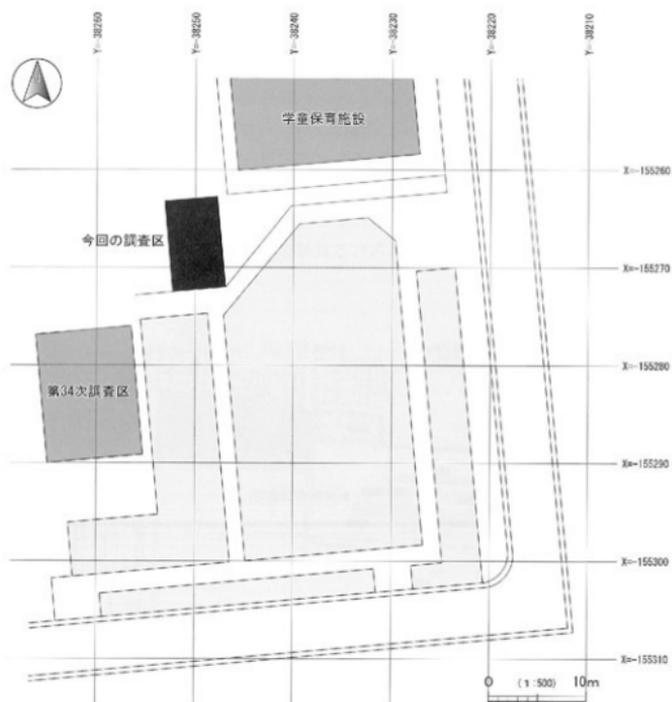
第1図 調査地周辺図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、宅地造成に伴うもので、当研究会が八尾南遺跡で実施した第38次調査にあたる。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表（T.P. +10.0m前後）下1.3m前後までを重機と人力を併用して掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は1ヶ所（東西長約5.4m、南北長約9.2mの長方形）で、面積は約50.0㎡を測る。調査で使用した標高の基準は、八尾市街区多角点20C32（調査地北西：T.P. +10.005m）である。

調査の結果、古墳時代初頭～前期に比定される遺構を4基検出した。出土遺物は、古式土師器、埴輪などで、コンテナ（縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m）1箱を数える。



第2図 調査区位置図

2) 基本層序

現地表(T.P.+10.0m前後)下0.4~0.8m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土層、及び攪乱(0層)である。以下現地表下2.0m前後までの1.2~1.6m間において11層(1~11層)の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+9.7~9.8m)である。2~4層は灰オリーブ色~灰色を呈した作土層(2層:T.P.+9.6m 3層:T.P.+9.5m 4層:T.P.+9.4m)である。5層は黄灰色~褐色~灰色を呈した作土層(T.P.+9.3m)である。6層は河川堆積層(T.P.+9.1m)である。7層は作土層(T.P.+9.0m)である。8層は古墳時代初頭~前期の遺物包含層(T.P.+8.8m)である。9層は湿地性堆積層(T.P.+8.7m)である。10層は河川堆積層(T.P.+8.4m)である。11層は湿地性堆積層(T.P.+8.1m以下)である。

0層:現代の整地に伴う客土・盛土層、および攪乱

1層:暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

旧作土層(T.P.+9.7~9.8m)である。層厚は10~30cmを測る。調査区全域に分布するグライ化の極めて顕著な攪拌層である。

2層:灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

調査区全域に存在するグライ化の進行した作土層(T.P.+9.6m)である。層厚は10~20cm。

3層:灰オリーブ色(7.5Y6/2)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

作土層(T.P.+9.5m)である。層厚は10cmを測る。調査区全域で確認したグライ化の顕著な攪拌層である。部分的に雲状酸化鉄分の沈着を認める。

4層:灰色(7.5Y5/1)粗粒砂~細礫混粘土質シルト

作土層(T.P.+9.4m)である。層厚は約10cmを測る。調査区全域に展開する攪拌層である。3層同様、部分的に雲状酸化鉄分の沈着を確認した。

5層:黄灰色(2.5Y4/1)~褐色(10YR4/1)~灰色(5Y4/1)粗粒砂~細礫混シルト質粘土~シルト作土層(T.P.+9.3m)である。調査区全域に展開する作土層で、層厚は30cm前後を測る。不明瞭であるが、2~3層に細分できた。

6層:灰色(5Y6/1)細礫混中粒砂~極粗粒砂

調査区全域に展開する河川堆積層(T.P.+9.1m)である。本地以外に存在する河川から供給された溢流堆積物と推測される。層厚は10~20cmである。古式土師器細片が少量出土した。

7層:褐色(7.5YR4/1)粗粒砂~細礫混シルト質粘土~粘土質シルト

調査区全域に存在する作土層(T.P.+9.0m)である。層厚は20cmを測る。古式土師器細片を少量含む。

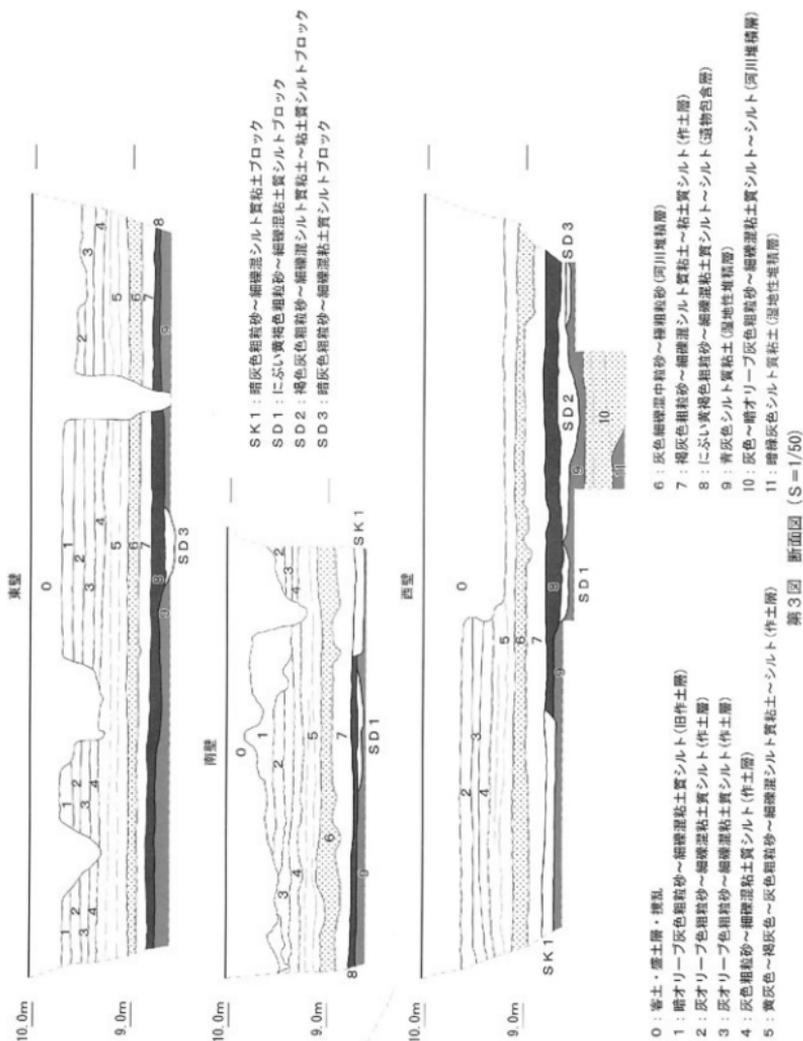
8層:にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂~細礫混粘土質シルト~シルト

調査区全域に存在する古墳時代初頭~前期の遺物包含層(T.P.+8.8m)である。層厚は10cm前後を測る。地層内には古式土師器や埴輪が混在していた。SK1の構築基盤層である。

9層:青灰色(5BG6/1)シルト質粘土

湿地性堆積層(T.P.+8.7m)である。グライ化の顕著な粘性の強い地層で、調査区全域に存在する。層厚は30cm。本層上面が調査面に相当する。

10層:灰色(10Y4/1)~暗オリーブ灰色(5GY4/1~2.5GY4/1)粗粒砂~細礫混粘土質シルト~シルト



下層確認において確認した河川堆積層(T.P.+8.4m)である。層厚は40cmを測る。粒度組成の差異により3層に細分できた。

11層：暗緑灰色(5G4/1)シルト質粘土

下層確認において確認した湿地性堆積層(T.P.+8.1m以下)である。夾雑物を含まないきれいな地層である。層厚は10cm以上である。

3) 検出遺構と出土遺物

8層遺物包含層を除去し、9層湿地性堆積層(T.P.+8.7m前後)を精査、検出した調査面である。古墳時代初頭～前期の遺構を4基検出した。内訳は、土坑1基(SK1)、溝3条(SD1～3)である。この内SK1については、断面観察の結果、8層上面を構築基盤面とする遺構であることが明らかになった。それ以外の遺構は、8層下面検出遺構と考えられる。

SK1

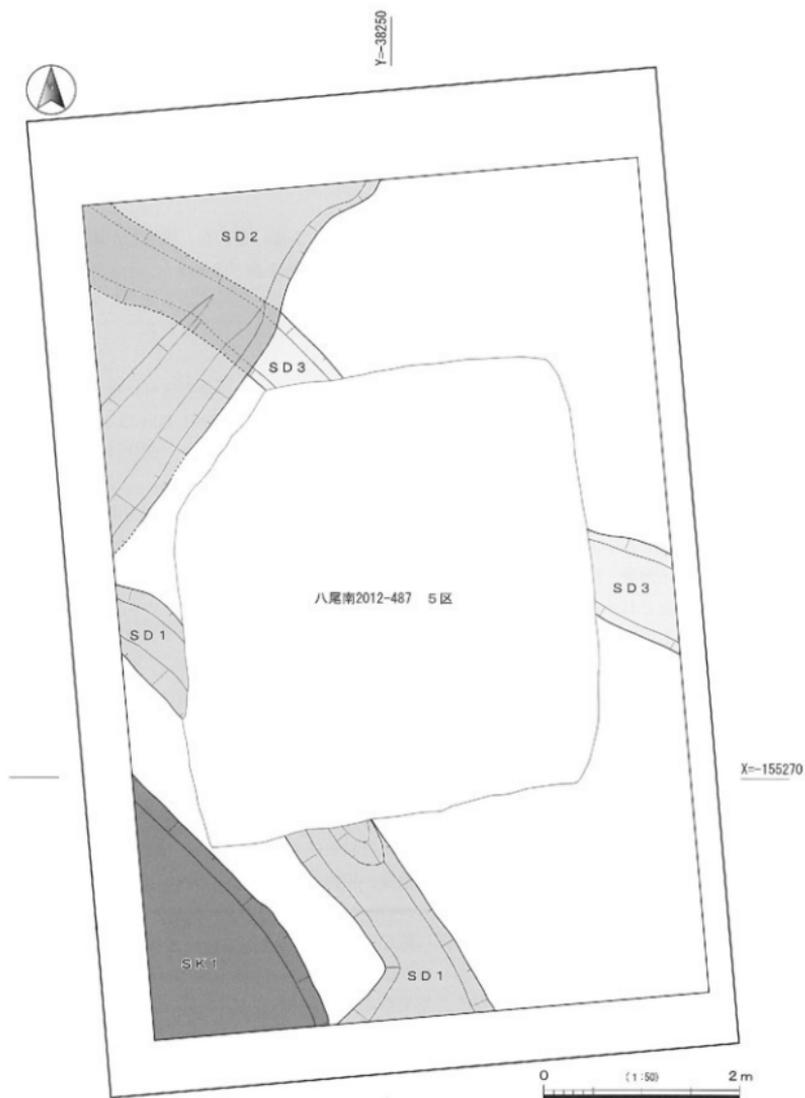
調査区南西隅で検出した南東-北西主軸の土坑である。西部と南部が調査区外に拡がるため全容は不明である。検出規模は、南東-北西長が2.50m以上、南西-北東幅が1.30m以上、深さ0.10mを測る。埋土はブロック土の単層である。古式土師器細片が少量出土した。図化は不可。

SD1

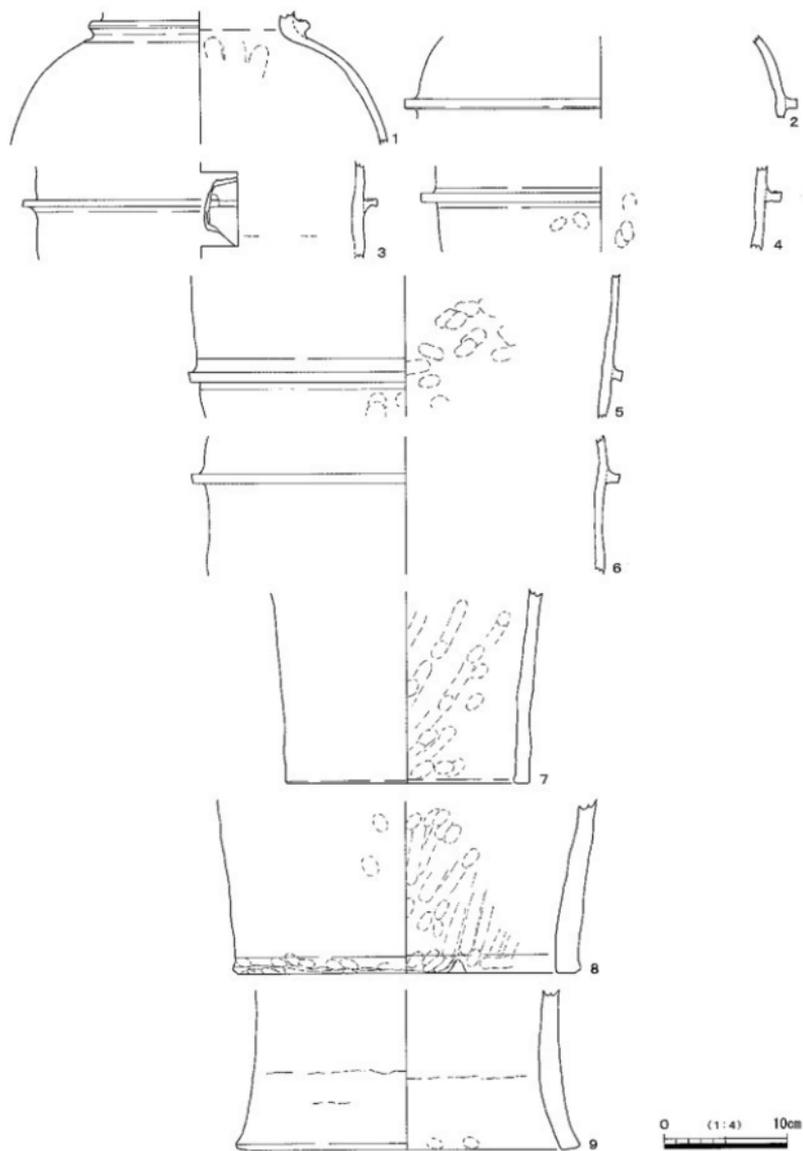
調査区南西部で検出した溝である。北西-南東方向に直線的に延びた後、南西方向にほぼ直角に角度を転じる「L」字溝である。検出規模は、北西-南北長が4.20m以上、北東-南西長が1.00m以上、幅0.60m前後、深さ0.10mを測る。埋土はブロック土の単層である。本遺構からは、古墳時代前期に比定される古式土師器や埴輪の細片が出土した。この内9点(1～9)を図化した。1～9はいずれも埴輪である。1・2は朝顔形円筒埴輪の頸部～肩部の細片である。いずれも肩部は球形に張るほか、1の頸部と、2の肩部と胴部の境界には、突出度の高い、断面方形を呈した突帯が1条巡っている。調整は、磨滅のため不明瞭であるが、突帯部外面は横ナデ、内面はナデや指ナデを行う。突帯径は、1が18.0cm、2が32.0cmを測る。3～6は円筒埴輪の胴部細片である。いずれも突帯の突出度は高く、断面形状は方形～長方形を呈する。調整は、ナデを主体とし、突帯部外面は横ナデで仕上げられる。この内3は鱗付円筒埴輪の可能性が高い。突帯径は、3が21.8cm、4が25.4cm、5が35.4cm、6が35.0cmである。7～9は円筒埴輪の胴部～底部細片である。調整は、概ねナデを行う。8の胴最下位外面には指頭圧痕を多く認める。底径は、7が20.0cm、8が27.4cm、9が27.6cmを測る。以上の埴輪は、川西編年のⅡ期の所産と推測される。

SD2

調査区の北西部で検出した南西-北東方向に延びる溝である。北部と西部が調査区外に拡がるため、全容は不明である。検出規模は南西-北東長が3.50m以上、幅が1.70m以上、深さが0.30mを測る。埋土はブロック土の単層である。本遺構からは古墳時代前期に比定される古式土師器や埴輪の細片が出土した。図化できたのは4点(10～13)である。10は古式土師器壺の体部下位～底部細片である。底部が突出する個体で、外面には横位ミガキを密に施すほか、内面は横位板ナデが行われる。底径は5.0cmを測る。11～13は円筒埴輪に胴部～底部細片である。11は胴部細片。突出度の高い断面方形を呈した突帯を1条認める。突帯径は33.9cmである。12・13は胴部下位～底部。12は、底部が自重により内側に肥厚している。13も自重により胴部最下位が内湾するほか、



第4図 平面図



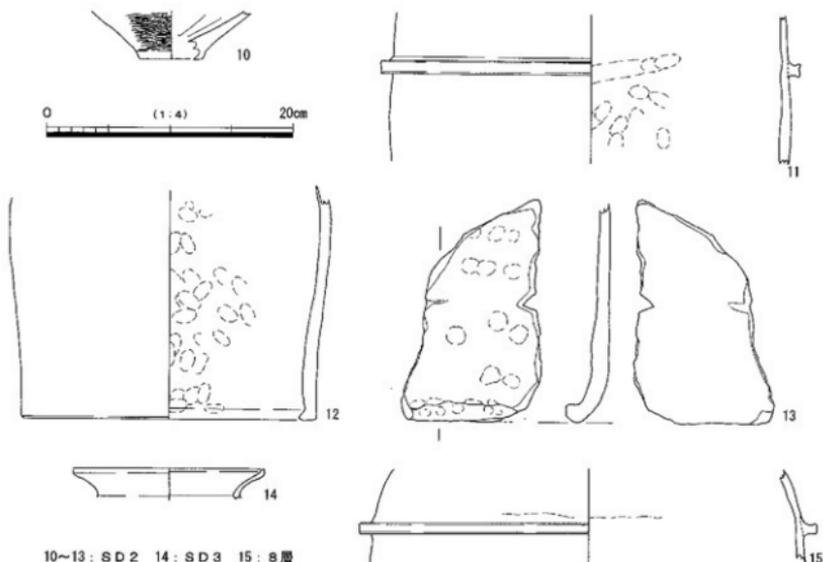
第5図 SD 1 出土遺物実測図

底部は内側に肥厚している。調整は、外面は不明瞭であるが、内面はナデが施される。12の底径は24.0cmを測る。11～13は川西編年のⅡ期に比定される。

SD3

調査区の北部～中部を南東-北西方向に直線的に延びる溝である。南東部が調査区外に延びるほか、北西部ではSD2に削平される。検出規模は、長さ5.80m以上、幅0.55m、深さ0.10mである。埋土はブロック土の単層。本遺構からは古墳時代初頭に帰属する古式土師器が出土した。この内1点(14)を図化した。14は古式土師器甕の口縁端部～頸部細片である。口縁部は外反し、端部を上方に拡張させる個体である。調整は横ナデを施すほか、頸部内面にはケズリを認める。口径は15.6cmを測る。古墳時代初頭の所産である。

その他、2～8層から古式土師器や埴輪の細片が出土した。図化できたのは1点(15)である。15は8層出土の朝顔形円筒埴輪の肩部～胴部の細片である。肩部と胴部の境界付近に突出度の高い突帯を1条張り付けた個体である。突帯断面形状は「M」字状を呈する。調整は不明瞭であるが、突帯部外面は横ナデを施す。突帯径は37.0cmを測る。



10～13: SD2 14: SD3 15: 8層

第6図 SD2・3・8層出土遺物実測図

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭～前期の遺構が4基検出された。構築基盤層の相違や遺構の切り合いから、これらの遺構の新旧関係を整理すると、新しい順にSK1→SD1・2→SD3となる。各遺構の帰属時期は、SK1が古墳時代前期以降、SD1・2が古墳時代前期、SD3が古墳時代初頭に相当する。この内SD1・2からは、川西編年Ⅱ期に比定される埴輪が出土した。したがって、これらの溝が古墳に伴う周濠であった可能性が高くなった。特にSD1は、『L』字状に屈曲することが確認されており、調査区の南西部に主体部を有する古墳の存在を示唆する成果として注目される。本地の南西に隣接する地点で行われた第34次調査では、T.P. +8.8m前後においてSD401が検出された。SD401は南東-北西方向に直線的に延びる溝で、今回の調査で検出したSD1とはほぼ並行して延びていた可能性が高く、SD401とSD1が一つの古墳を構成する周濠であった可能性がある。この場合、SD401とSD1を周濠とする古墳は、一辺10m前後の方墳であったことが想定される。当該期の本地周辺が、墓域に位置していた可能性が高くなった。

【参考文献】

- ・島田裕弘2007『八尾南遺跡（第27次調査）』（財）八尾市文化財調査研究会報告102』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子2011「Ⅳ 八尾南遺跡（第34次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告134』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一2011「Ⅴ 八尾南遺跡（第35次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告134』（財）八尾市文化財調査研究会



調査地周辺状況(北から)



調査地周辺状況(南西から)



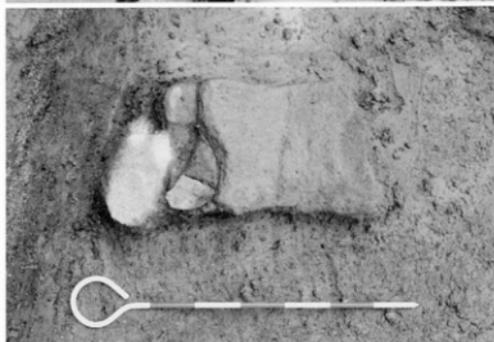
調査地周辺状況(南東から)



全景(北から)



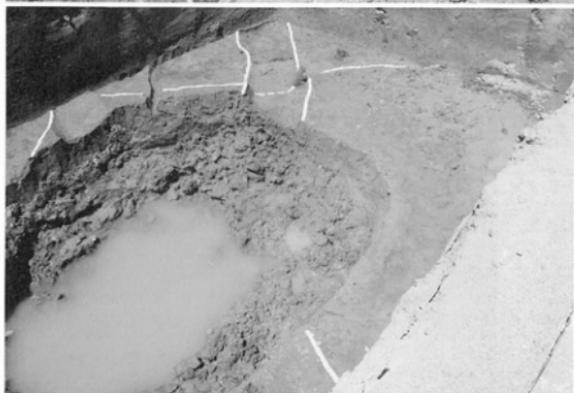
SK1・SD1(北東から)



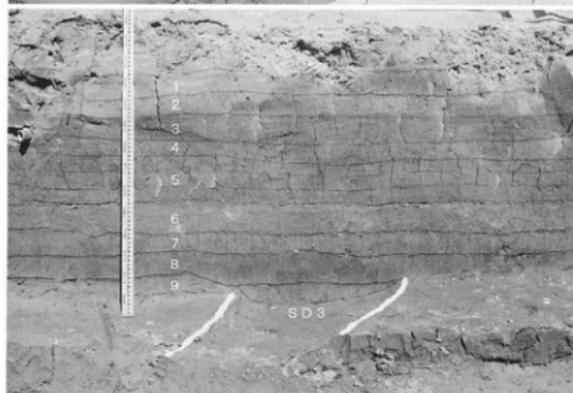
SD1 埴輪出土状況(北東から)



SD 2 (北東から)



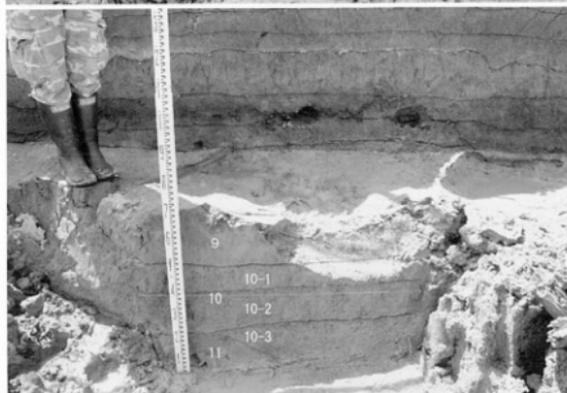
SD 3 (南東から)



東壁断面(西から)



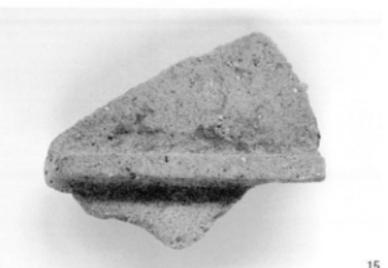
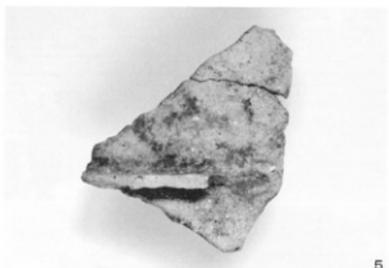
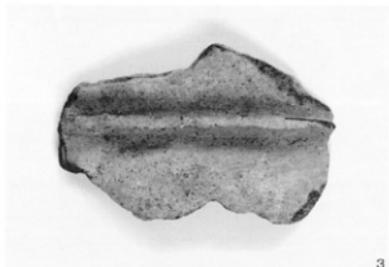
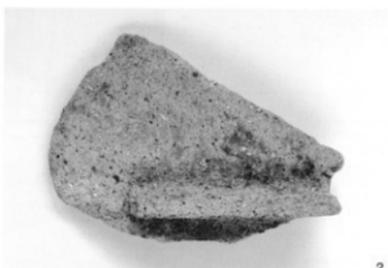
西壁断面(北東から)



西壁断面(下層確認状況：東から)



断面実測状況(南東から)



報告書抄録

| | |
|--------|--|
| ふりがな | きのもといせき とうごういせき やおみなみいせき |
| 書名 | 木の本道跡 東郷道跡 八尾南道跡 |
| 副書名 | |
| シリーズ名 | 公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告 |
| シリーズ番号 | 148 |
| 編者名 | 丁・II坪田真一(編)、III樋口 薫 |
| 編集機関 | 公益財団法人八尾市文化財調査研究会 |
| 所在地 | 〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700 |
| 発行年月日 | 西暦2015年3月31日 |

| 所収遺跡 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
|-------------------------------|-----------------------------------|-------|----------|-------------------|--------------------|---------------------------|-------------|------------------|
| | | 市町村 | 遺跡 番号 | | | | | |
| きのもといせき 木の本道跡 (第26次調査) | おおさかみやまのきのもといせき 大阪府八尾市木の本2丁目 | 27212 | 35 | 34度 36分 04秒 | 135度 35分 11秒 | 20140224 ～ 20140226 | 約23 | 記録保存調査 分譲住宅建設 |
| とうごういせき 東郷道跡 (第76次調査) | おおさかみやまのとうごういせき 大阪府八尾市東本町3丁目 | 27212 | 37 | 34度 37分 44秒 | 135度 36分 12秒 | 20121009 ～ 20121013 | 約48 | 記録保存調査 分譲住宅建設 |
| やおみなみいせき 八尾南道跡 (第38次調査) | おおさかみやまのやおみなみいせき 大阪府八尾市西木の本4丁目 | 27212 | 67 | 34度 35分 59秒 | 135度 34分 59秒 | 20130819 ～ 20130822 | 約50 | 記録保存調査 宅地造成 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構・地層 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------------------|----|------------------|----------------|----------------|------|
| 木の本道跡 (第26次調査) | 集落 | 中世 | 溝 | 土師器、須恵器 | |
| 東郷道跡 (第76次調査) | 集落 | 古代末～近世 | 井戸・土坑・ピット・溝 | 土師器、須恵器、瓦器、陶磁器 | |
| 八尾南道跡 (第38次調査) | 集落 | 古墳時代初頭 古墳時代前期 | 溝 土坑、溝、古墳周濠 | 古式土師器 埴輪 | |

| | |
|----|---|
| 要約 | 木の本26次では中世の生産関連の溝を検出した。東郷76次では古代からの主要街道である立石橋道沿いに発展した中世の居住域を示す遺構群を検出した。八尾南38次では前期古墳の周溝と考えられる溝を検出した。 |
|----|---|

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告148

I 木の本遺跡(第26次調査)

II 東郷遺跡(第76次調査)

III 八尾南遺跡(第38次調査)

発行 平成27年3月
編集 公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 徳近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 マットコート <70Kg>
図版 マットコート <70Kg>

